

# カメルーン東部州の村落における生計手段の概況とその変遷

田中 祐太郎

キーワード：生計アプローチ、農村開発、生計手段、カメルーン、土地利用

## 1. 背景と目的

アフリカ・コンゴ盆地における森林破壊が近年進んでおり、緊急な対策を必要とする課題となっている。一方で、同地域周辺に暮らす住民は伝統的に、豊かな自然資源や土地を利用しながら生計を立ててきおり、現地住民たちの生活と森林保全を両立させられるような生業戦略の確立が求められている。他方、農村開発の現場では従来の、現地の事情を把握しないまま進められる開発を反省し、住民の生業や、生業を選択する際に働く要因等について把握した上で開発を進めようとする生計アプローチという概念が登場した。そこで、本研究ではコンゴ盆地周辺国カメルーンの東部州、森林サバンナ移行帯に位置する村落において、現地の住民の生計手段の概況とその変遷を把握し、住民を行為主体として捉えた場合に、住民がどのようにして生計手段を選択しているのかを考察することでよりの確な地域理解に資することを目的とした。

## 2. 調査地概要

カメルーンは中部アフリカに位置しており、調査地であるアンドン村は同国東部州・ロム県に位置しており、標高は約 680m、平均気温は約 22～23℃、平均年間降水量は 1450mm 前後であり (Shibata, 2011)、一年の中に 2 回の乾季 (12 月～3 月、7～8 月) と 2 回の雨季 (4 月～6 月、9 月～11 月) を持つ。森林サバンナ移行帯に位置するアンドン村では、伝統的に森林資源を利用しながら暮らしてきたが、市場経済の浸透により森林の伐採圧力が高まっている。

## 3. 生計手段の概況と変遷

農作物、特にキャッサバによる収入が多く世帯にとって最も重要な収入源となっていることが分かった。キャッサバ畑の拡大、もしくはカカオ農園の新規開墾を望む人が多く、今後も農作物による収入が村内では重要な収入源となることが予想される。また、過去にはキャッサバ以外にもパイナップル等が換金作物として広く栽培されており、市場の需要変化に応じて栽培する換金作物を柔軟に変化させてきたことが分かった。

## 4. 村内の生計維持機構

村内では、ブッシュミートの販売や酒作り等、様々な生業が市場の需要変化とは異なる論理で維持されていることが分かった。そして、それら生業が維持されているのは労働力や現金といった「資源」が流動的に流れている点、資源の流動を可能にする村人同士の関係性、また各々が生業を選択する際に労働力が小さい方法を指向する傾向性が大きく寄与していると考えられる。これら機能が働くことで資源を持たない人が収入機会を得ることが可能になり、自身の生計を立てることが出来ると考えられる。

参考文献：Makoto SHIBATA(2011), “A comparison of soil solution composition from forest and savanna vegetation in eastern Cameroon” Progress Report Forest-Savanna Sustainability Project, Cameroon, pp 188-193.